

八久保先生を偲んで

尹 亭 仁

私の記憶には笑顔の八久保先生しかいません。初めて会った二〇〇二年四月一日の日も、一〇年の歳月が流れ杳の中で静かに眠っている先生に「さようなら」と言って手を振った日も、先生は笑顔でした。

八久保先生と私は学部唯一の着任同期でした。当時外国語学部長だった日高先生と一緒に人文研究所に向かう途中、自己紹介を始め色々と言葉を交わしました。童顔のやさしそうな瞳、腰の低い態度、おっとりした口調からいいおじさんの印象を受けました。その時、私は八久保先生のご名字をハチクボと正しく読めたものの、名前はコウシではなくアツシと読んだのですが、それを先生は妙に喜んでいました。二、三年前、なぜかまたこの話が出た時にも先生はまた嬉しそうでした。きっと、ご自分の名前でかけをしていたと思います。お名前を正確に読めた人はほとんどいないと言っていたので、勝率が上がるたびに、なんだか勝った気がして笑みがこぼれたのかも知れません。確認したいですが、もうすべはありません。

着任同期と言いながら、私はこの一〇年間八久保先生の研究室に行ったことはありません。実は研究室がどこにあるかも知りませんでした。一六号館で一緒に仕事をするようになってからも用事がある時は八久保先生

が訪ねてきましたし、平井先生の部屋の前で会うことが多かったからです。

それなのに、今年は不思議にも先生の研究室の前を通らないと行けないところにある教室で授業をやることになりました。新学期が始まっていたのに、先生の部屋には明かりがついていませんでした。今日は来ていないのだと思った私は、そのうちお宅訪問ならぬ研究室訪問を敢行しようと、にやにやしながら自分の研究室に戻ったものでした。しかし、その企ては実現できませんでした。届いたのは一枚のお通夜の知らせでした。いつも笑顔だったので、そんなに深刻だとは思わなかったため、知らせを聞いた時には信じられず、人前で子どものようにわんわん泣いてしまいました。

3年ほど前、みなとみらいホールで大学の吹奏学部の定期演奏会があった時に、先生が奥様と一緒に見えていたので挨拶を交わしました。よくなったのかと聞いたら、いつもの笑顔で首を横に振りました。私は自宅から近いという気軽さから行きましたが、自宅が遠い先生は学生思いでいらっしやっただけだと思いました。お通夜の夜は、後ろの席から学生たちのすすり泣きの声が絶え間なく聞こえてきました。学生を思う心の強い先生だったから、慕われていたことが改めて分かりました。

「立山」と「高清水」は八久保先生が教えてくれたお酒の銘柄です。私が出張で富山に行くと行ったら先生は嬉しそうに「富山は立山だよ」と言ってくれました。それで私は富山からの帰りに大量の立山を買ってきました。先生にも一本さしあげました。また秋田へ行くと行ったら、「秋田は高清水だよ」と教えてくれました。私は高清水を何本か買ってきました。仙台、新潟にも行きました。そのつど先生は何か銘柄を教えてくださいましたと思いますが、忘れてしまいました。私がお酒を飲まなくなったからです。でも、立山と高清水は、初恋の人の

名前のように忘れそうありません。先日、韓国の新聞に日本のお酒特集が載っていました。八久保先生に見せてあげたかったし、聞いてみたいことも色々ありました。悔しいです。

平井先生から八久保先生の研究室が切手の宝の山だと聞く前までは、そういう趣味があるとは知りませんでした。考えてみたら切手集めは地理が専門の人ならありうる趣味でした。私は今まで地方に行くと、JRの駅前で写真を撮るのがちよつとした楽しみでした。しかし切手集めもいろいろな気がしてきました。連れ合いにこれからは行く先々で地名が分かるところで写真を撮るのではなく切手を集めると言ったら、いいんじゃない、集めて分類するのはあなたの得意分野でしょうと言われました。

切手集めはお酒集めより長く続きそうです。国内だけでなく、海外に行った時も手に入れて来ようと思います。授業で世界の色々な言語の特徴を取り上げながら、文字の特徴が分かる紙幣も見せたりしていますが、切手も登場させてみたくなりました。取り上げるたびに八久保先生のことを思い出すと思います。

今もまだ八久保先生が、キャンパスにいるような錯覚を時々起こします。しかしそれが、間違いであることを思い知らすのは葬儀の時の記憶です。柩の中で静かに眠っている先生を見ました。私にとってこういう対面は初めてでした。多少怖い気持ちとさようなら言わないと後悔しそうな気持ちと葛藤している時に、平井先生が「是非、見てみてください。格好いいですよ」と背中を押してくれました。普段と変わらぬ笑顔の先生がそこにいました。先生の穏やかに眠っている顔は今も鮮明に覚えています。

ふと大学の友人を一人思い出しました。彼は卓球が非常にうまい人で、誘われた時の私のレベルはひどいものでした。卓球場で知り合いから運動神経があまりにも鈍いから上達の見込みがないとまで言われた私でした。

しかし、彼は怒りもせず、文句も言わず笑顔で私が変に返したボールを決まったところにきちんと戻してくれました。そうしているうちに私のフォームは安定してき、打つ時にスピードもついてきました。夏休みにある卓球場に行った時は、「こんなに卓球がうまい女子学生は初めてだ」とほめられました。八久保先生は私にとってそういう人だったような気がします。先生に会うとよく冗談を言ったりぐちをこぼしたりいたずらをしたりに変に笑いながらふざけたりしました。しかし先生はいつもの笑顔でまじめに応じてくれました。あの友人のボールのように。

八久保先生は私の気の置けない数少ない同僚の一人でした。小春日のような人だったと思います。先生の悲報に接してから一人で何度も泣きました。先生の早すぎる死が悲しかったのもありますが、気兼ねもせず話ができる同僚が一人いなくなったことがもっと悲しかったからです。共同研究会を立ち上げて一緒に韓国へ調査に行く約束もしたのに。

九月になってからなぜか先生の研究室に行ってみたくになりました。明かりが消えた部屋は「在室」になっていました。ネームプレートはついたままでした。本当は中にいるでしょう、と叩いてみたくになりました。「不在」よりはなんだか救われた気持ちでした。

後期の足音が聞こえてきます。また週一回は先生の研究室の前を通らないといけません。私は、八久保先生はいつ戻れるか分からない調査旅行に出かけたと思うようにしました。もう会うことはできないけど、忘れることもない八久保先生、Bon voyage!